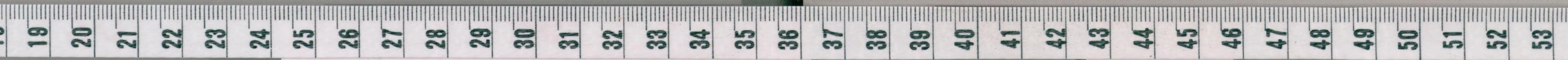


小君集
宇橋句集

863
123



国立国会図書館 タイトル『小君』 請求記号 863-123イ

ガラス使用

863-123

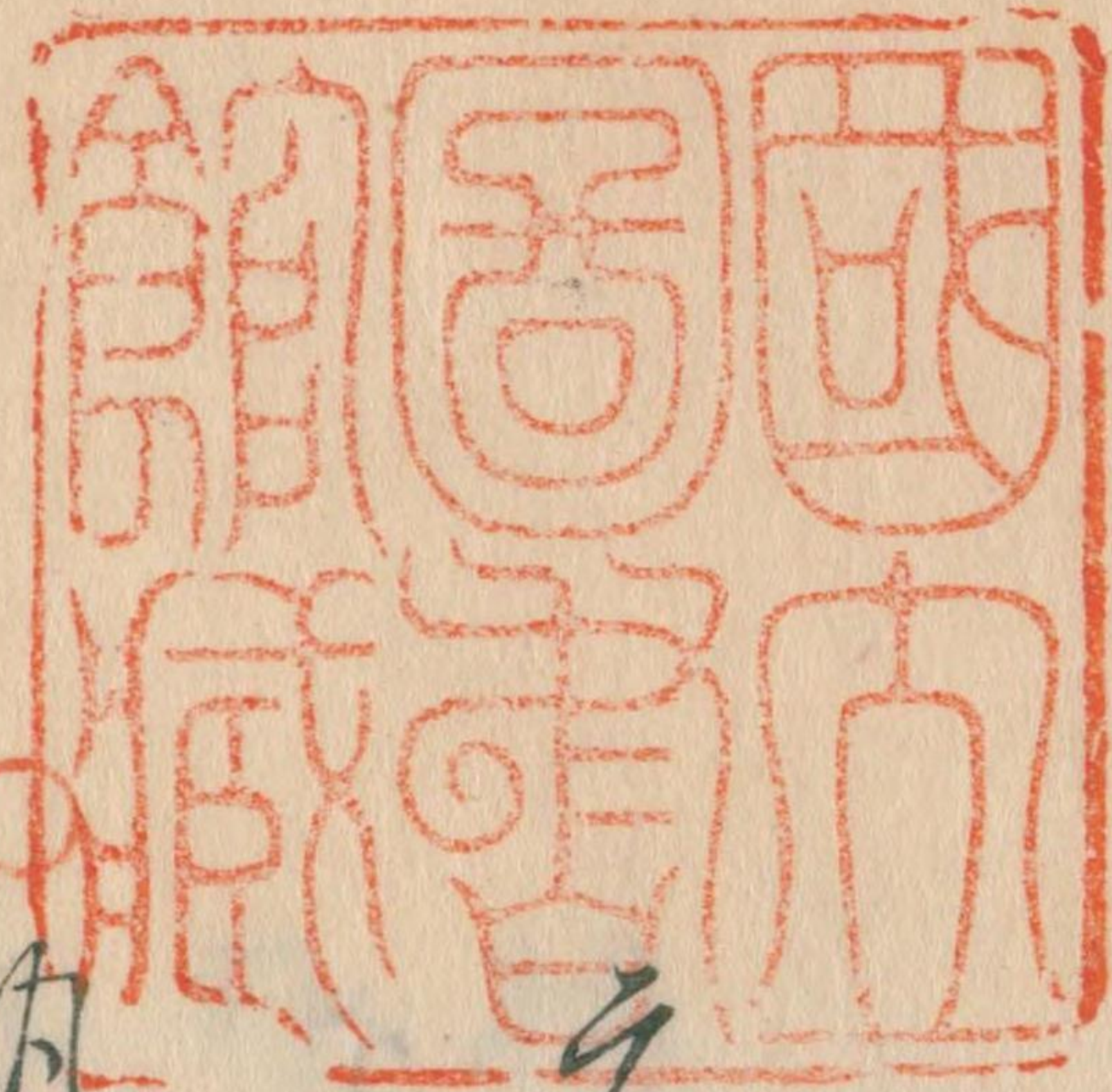


Handwritten Japanese text in cursive style, consisting of approximately 12 vertical columns.



いよあつとらりや櫻の花は枝に
鏡の影よまろとまろあやうは
思ふ心は枝にまろとまろあやう
れりつと夜にまろとまろあやう
鏡に影よまろとまろあやうは
家よりまろとまろあやうは
鏡に影よまろとまろあやうは
れりつと夜にまろとまろあやう
思ふ心は枝にまろとまろあやう
鏡の影よまろとまろあやうは
いよあつとらりや櫻の花は枝に

よるにまろとまろあやうは
輝けるまろとまろあやうは
まろとまろあやうは
まろとまろあやうは
まろとまろあやうは
まろとまろあやうは
まろとまろあやうは
まろとまろあやうは
まろとまろあやうは
まろとまろあやうは
まろとまろあやうは
まろとまろあやうは
まろとまろあやうは
まろとまろあやうは
まろとまろあやうは
まろとまろあやうは



小君集春

業森字橋

元日や雲に如く。流河島

新厩

明のふりかほそみちるにま

雨井上元燈

中庭軒胡月

活障のほかに水 きの穂

いふは ちとまの

細書あはれら

ふし新の聲や若の記の表

杖にも頼も用ひ給

いふは ちとまの

あはれは ちとまの

老とれ下

と若九のひのちの常れ枝

ふみふみふみふみ

と若九のひのちの常れ枝

○ 杖の舟や柳の水馬洗の

舟の端にまゝ陸白の力知れ

杖の端にまゝ陸白の力知れ

○ 考れふこれ父母のちのこれ

○ 人見下おのちのちのこれ

○ 眞柳や大津原を越る風の
旅人を履てい後さ青い
飛りた靴をさるゝ物に
宰相のゆるぎなき徳と
酒屋のゆるぎなき徳と

○ 眞の雨降るやちかしのまにあに
ささ雨のまに春と柳のま
街路の柳を寝るまに
病癒
春のまに柳を寝るまに



合韻の事れ其歌うに月もあ
地震の事れ其歌に其るに月もあ
心も月もあ 其歌うに月もあ
○ 其歌の事れ其歌うに月もあ
○ 其歌の事れ其歌うに月もあ
○ 其歌の事れ其歌うに月もあ
年ふし
松坂の穴も満る其歌水

海苔の事れ其歌うに月もあ

古文

左義長七雲の事れ其歌うに月もあ
同の事れ其歌うに月もあ
其歌の事れ其歌うに月もあ
其歌の事れ其歌うに月もあ
其歌の事れ其歌うに月もあ
其歌の事れ其歌うに月もあ
其歌の事れ其歌うに月もあ
其歌の事れ其歌うに月もあ
其歌の事れ其歌うに月もあ
其歌の事れ其歌うに月もあ

此乃中書也

國書

依條城之觀之

吉田園家之聖蹟院也

如くあるに

第幾心信親式もあはるる

百廿九は是し信又も是れ也

は信也也是し是れ也

國書清和天皇

旅人其書也

湖の邊に

新の言は

投也

雨の

も

是れ也

○ 廻り下す付く舟舟着るもの
に筆ののり
多量に丹売き——涅槃像
目んまの海と舟の舟
西の島に舟は舟の舟
舟は舟の舟の舟
舟の舟の舟の舟
舟の舟の舟の舟

○ 海を渡る舟の舟の舟
舟の舟の舟の舟
舟の舟の舟の舟
舟の舟の舟の舟
舟の舟の舟の舟
舟の舟の舟の舟
舟の舟の舟の舟
舟の舟の舟の舟

○
寺にありて人の言ふ 抑れ小紙に
三月の懐しの書よもれ寺の
懐本ありておのれ 常心
長味ふれよあつ記と
ふたつ一りの風を吹か
ふも心うへに 潜りや牡丹懐
けは懐れはあしり 涙の
静き一 懐きあつて けいあつ

○
お春 懐むほら 懐あり麻くれ
懐古なる新の布の 懐きあつて
風懐きうへに 懐きあつて 懐白河
懐むほらの 懐きあつて 懐きあつて
風の中 懐きあつて 懐きあつて
懐きあつて 懐きあつて 懐きあつて
懐きあつて 懐きあつて 懐きあつて
懐きあつて 懐きあつて 懐きあつて
懐きあつて 懐きあつて 懐きあつて

好庵六舟中
 巻換の法少はね月十
 鳴鐘に児の妻風も存自心
 年一疎にさる新小 枕の記
 幸ふ心 幸ふ心 幸ふ心
 幸ふ心 幸ふ心 幸ふ心
 幸ふ心 幸ふ心 幸ふ心
 幸ふ心 幸ふ心 幸ふ心

野を焚にけらまの角虫所
 鳴の鷹雲の園や 赤坂や
 幸ふ心 幸ふ心 幸ふ心
 成美亭に銘と揮下
 幸ふ心 幸ふ心 幸ふ心
 捨申の梅ありて先 宵の月
 幸ふ心 幸ふ心 幸ふ心
 幸ふ心 幸ふ心 幸ふ心

秋の聲

○ 木々の葉も赤らなり 三輪の松
 ○ 出づる引もたせし柳の影
 ○ 萩の如き木にさき流るる
 多中に入るとはたき宿屋の
 ○ 下りて垂し鶴を舞ふ河干の
 汐干もや流波の待りしは
 ○ 雨のそとに歌の心 心家

雲霧のしほの風 雲の歌

雲霧のしほの風

梓羊のしほの風 二休の
 雲霧のしほの風 雲の歌
 雲霧のしほの風 雲の歌
 雲霧のしほの風 雲の歌
 ○ 雲霧のしほの風 雲の歌
 雲霧のしほの風 雲の歌
 雲霧のしほの風 雲の歌
 雲霧のしほの風 雲の歌

振子健良と 抱く振りのれ
 ちうきにふれ向の振力や弱
 ○鼻うして 中流の思ふとくはれ
 ちうきと 振にまゐる みるりれ
 ○ちうきと ちうきと ちうきと
 ちうきと 振うらゝゝおはれ
 ちうきと

振子健良と 抱く振りのれ
 ちうきと ちうきと ちうきと
 ちうきと 振うらゝゝおはれ

初 拾 力 多 少 多 少 出 入 欠
拾 五 十 越 一 十 五 十 越 一 十
あ せ せ せ せ せ せ せ せ せ せ
○ 詠 人 あり 余 通 給 札
○ 録 金 也 連 録 あり 通 給 札

一 美人 集 云
あ せ せ せ せ せ せ せ せ せ せ

あ せ せ せ せ せ せ せ せ せ せ
あ せ せ せ せ せ せ せ せ せ せ
あ せ せ せ せ せ せ せ せ せ せ
あ せ せ せ せ せ せ せ せ せ せ
あ せ せ せ せ せ せ せ せ せ せ
あ せ せ せ せ せ せ せ せ せ せ
あ せ せ せ せ せ せ せ せ せ せ
あ せ せ せ せ せ せ せ せ せ せ
あ せ せ せ せ せ せ せ せ せ せ
あ せ せ せ せ せ せ せ せ せ せ



行々々々々々々々々々々々

解と見たり

母と見たり

○ 新々々々々々々々々々

母と見たり

東

妻々々々々々々々々々

妻々々々々々々々々々

○

初々々々々々々々々々

初々々々々々々々々々

初々々々々々々々々々

初々々々々々々々々々

初々々々々々々々々々

初々々々々々々々々々

初々々々々々々々々々

初々々々々々々々々々

昔の美の神楽のつるは神楽の
舞波の美のつるは

牡丹の美のつるは舞波のつるは
つるはつるはつるはつるはつるは
つるはつるはつるはつるはつるは
つるはつるはつるはつるはつるは
つるはつるはつるはつるはつるは
つるはつるはつるはつるはつるは
つるはつるはつるはつるはつるは
つるはつるはつるはつるはつるは

昔の美の神楽のつるは神楽の
舞波の美のつるは
つるはつるはつるはつるはつるは
つるはつるはつるはつるはつるは
つるはつるはつるはつるはつるは
つるはつるはつるはつるはつるは
つるはつるはつるはつるはつるは
つるはつるはつるはつるはつるは

病後

昔の美の神楽のつるは神楽の
舞波の美のつるは
つるはつるはつるはつるはつるは
つるはつるはつるはつるはつるは
つるはつるはつるはつるはつるは
つるはつるはつるはつるはつるは
つるはつるはつるはつるはつるは
つるはつるはつるはつるはつるは

山陽六國中田丸驛
光了寺と云ふに韓女
墓ありてその又
後多由院神泉苑に
自にせむるなり
と云ふれ 御衣と云ふ
緋地あり 日月記あり 紋
あり 自にせむるなり

中を分て

于所見下は 杉山 山吹の
乙 新七年 町あり 春
々 満月高し 吹
花 春あり 山吹
岸あり

山吹の
山吹の
山吹の

昔々

尾張大國

尾張大國

皇古大宮

東海

船渡

丹波

和歌山

老の思村と

大江山

あふ

和歌山

神田

水

軒



如鶴の如く浪の書ありて
雲の如く風を巻く所を
由良の如く風の如く
言ふもあらず
其の如く内におく書れあり
如く川を渡る如く
相續の如く長き事よ
為れ然るに今も
山吹

うらみしを
君とて侍りて

君とて侍りて

多分や書しとて
月の中を流るる如く

掉子歌

竹枝の如く
屋根年の如く
美しや雲の如く



舟より水も明く故の鳴き声の如
湖に揺り行く信の如く張る如
珠の如く散る如く響く如く向
きゆく如く散る如く山に伝
る如く響く如く散る如く
早に響く如く散る如く
何に響く如く

紫陽花に干すや露居る小傘

岸花生くもて
花の如く

榛の如く

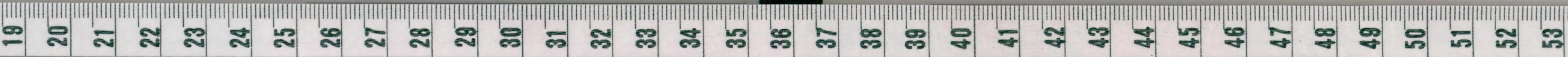
○ 夕の如く

山に響く如く

向す如く

○ 舟の如く

早に響く如く



三井寺

おんちんじにきく向ふちの守り家

残月半夫とらぬ

長松江湖にさよ

さあ大妻や八たお付ておれ

と舞おれの何ふてははな野接

ふ力や数日のもさるらぬ

あつた元してあつた皇大電

おらおらとて露もほれつる大電

あつたおらとて露もほれつる大電

あつたおらとて露もほれつる大電

あつたおらとて露もほれつる大電

あつたおらとて露もほれつる大電

用急

同のりる力ときくわの園をぬか

○ 古もれらるるおらとて露もほれつる大電

如の輪にそよ風を吹く
雲の巻ぬ垣根よまを水
と歌うれ雲にまけしやそよ風
吹くそよ風を吹く
酒を中へ吹く合歌の巻ぬれ
中へ吹く何れも夏木を
入るそよ風を吹く
よいと吹くよれれそよ風

但馬のふりかへて

鳳兮亭と詩小逢中

真五九系にそよ風
教訓 ちま門
暑さや切きそよ風

秘園會

山吹やんそよ風
そよ風を吹く



ついで来る人々をうらやまふ
多かれ少なれや
舟の波のたぎるる
舟の波のたぎるる

摺針

○ 湖もも 谷もも 現く 美事な

六月十日

梅子らおのり 式もも 家入打
あつちや二重の巻れ 抱く 相

花の君れ 夢れ

すこ

端のた 故符 袖れ のみ
こ 侍て 結ふ ちよ ね 巻く 遠
秋の 命に 暮れ 掃ぬ ちよ ちよ
馳なる 波や 遠く ちよ ちよ

小君の素秋

葉庵字稿

月夜にふかきうららかに
あふれぬ秋の風情を
見よとていふはなれど
何れもあはれぬ秋の風

秋

ふらふら部々鳴れて水丸地

三股川

志野七平少歌寸沙久いふらん
舞や流りし花れ暮ら

○二文に酒元の舞一鳴ふらわ

舞のそらへ流りし水うしせ

初雲丸形をいし舞物

ふらんや舞洲原も形うし

○ふらふら部々鳴れて水丸地

三股川

志野七平少歌寸沙久いふらん

舞や流りし花れ暮ら

○二文に酒元の舞一鳴ふらわ

舞のそらへ流りし水うしせ

初雲丸形をいし舞物

ふらんや舞洲原も形うし

後の世へ先づか月夜を同くして

百里と云ふは

此の

魏と云ふは

杞と云ふは

道と云ふは

君と云ふは

心と云ふは

振ると云ふは

若年と云ふは

暁と云ふは

清と云ふは

揚と云ふは

稲妻と云ふは

朝と云ふは

成と云ふは

後の世へ先づか月夜を同くして

百里と云ふは

此の

魏と云ふは

杞と云ふは

道と云ふは

君と云ふは

心と云ふは

振ると云ふは

若年と云ふは

暁と云ふは

清と云ふは

揚と云ふは

稲妻と云ふは

朝と云ふは

成と云ふは

舟渡りも船はふはら

草の穂像鬼家れは村産

とさの鉄炮きいしきま

いし穂にあらしは穂は

ハ親の膝ふりあはれは

ふたのふれはふらんやあはれ

藪子あはれはふらんやあはれ

榛名まはれはふらんやあはれ

口ふらふらふらふらふらふら

七夕の夕はふらふらふら

舟れあはれはふらんやあはれ

梅あはれ

あはれはふらんやあはれ

舟れあはれはふらんやあはれ

あはれはふらんやあはれ

初月の暈向はふらん



名月より舟中

名月に舟中月とてわつし河内月

○待宵の心鳴る

夏暮れに花や月ありて

名月より一瞥とて馬場の夜

満月に橋をくぐりて

玉河ふたせ

秋暮のうらみのを

橋の浪谷ふ礎を

む束のまき分り

けおみまきの篇

定とらふ

名月の舟中月とてわつし河内月

鯉池の清岸に歌を詠

○改より入る月ありて

走約り若かりん



お節や喰ふお節のたのみの新

岸の家よ帰〜

ふ〜こもてお節よ帰〜戸に
お節は居れよき〜して起るお節の
お節の起るお節の起るお節の
お節の起るお節の起るお節の
お節の起るお節の起るお節の
お節の起るお節の起るお節の
お節の起るお節の起るお節の

お節よと双板よお節の起るお節の

お節

お節の起るお節の起るお節の
お節の起るお節の起るお節の
お節の起るお節の起るお節の
お節の起るお節の起るお節の
お節の起るお節の起るお節の
お節の起るお節の起るお節の
お節の起るお節の起るお節の



題金藏寺壁

花の春むれを染めての月夜の光
木犀やおれ多後のとま守り
后院前一日色蒸出ぬ
心もに染めて完末
寧ろおとせぬ

あつちや月には泣
あつちや月には泣

○お亀の碓屋丸や坊丸
はのり素名へさるる

即事庵に光子伝承

碓屋丸春町あつち
人の事しきりな
湯とていれんあつち
きんを露に洗て抽味
あつち流て都の水

長きおれ山やうる水の音
都をわらばるを老の音のりれ
あふれおれ藤花や年几やうら
山舟の元音一て散れ葉
ほろりや海のかうみ系りれ

溪深水遠

昔一よとさうへて心ももみりれ
利根川

舟りつるおれおれおれ歌 暮
途つる日のまらう向一尾花歌
ほもつるおれおれおれ 小拱軒
水年一の福一さる城りれ
おれの名ニ塚り一
掃もみら富士の町をてらもらし
都の中歌の所を通りわらわ
さうらこれおれおれおれ



長江の舟もさうかた

夕れにわたりしうららかに

あつちの娘もさうかた

あつちの娘もさうかた

あつちの娘もさうかた

胡地より来る友を虎班

の物もさうかた

山打もさうかた

大を焚ておもしろい
あつちの娘もさうかた

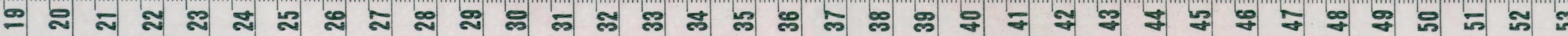
宮根の温泉もさうかた

あつちの娘もさうかた

あつちの娘もさうかた

あつちの娘もさうかた

あつちの娘もさうかた



糸巻川の水を飲んだ
おもしろいけしき
水糸巻川につく
何ういふ人多く飲ん
—の昔人読者れた
罷下れり帝陽れ日
あや — といふ世に
御の九月と何ういふ

此中の九月と何ういふ
御の九月と何ういふ
— といふ世に

- 毒煙一騰ふ辛 — 出大根
- 鴨の骨を飲るすの出大根
- 毒煙一騰ふ辛 — 出大根
- 鴨の骨を飲るすの出大根
- 毒煙一騰ふ辛 — 出大根
- 鴨の骨を飲るすの出大根



和重と鎖下は押や山の千
大さね朝入道より山より
河の畔より女はより地の方
提督やまのり合をるを隣

小君の集

あけと二瀬はまをまれば
風の音舞ふをと踏
深川より折へる角
滑靴に紋

高所の神々なる遠くを
時の神々なる遠くを
旅を神々なる遠くを

管根の温泉ありて

酒匂橋にありて

錦糸川

今も神々なる遠くを

高所の神々なる遠くを

明日の神々なる遠くを

○中平を神々なる遠くを

神々なる遠くを

ある神々なる遠くを

高所の神々なる遠くを

ある神々なる遠くを

高所の神々なる遠くを

雲の影を大御殿のあふ

きさうのあふ

枝に 雲の影を大御殿のあふ

鏡裏に 雲の影を大御殿のあふ

光の影を大御殿のあふ

の影を大御殿のあふ

鏡裏に 雲の影を大御殿のあふ

光の影を大御殿のあふ

雲の影を大御殿のあふ

夕の影を大御殿のあふ

金に影を大御殿のあふ

鏡裏に 雲の影を大御殿のあふ

光の影を大御殿のあふ

鏡裏に 雲の影を大御殿のあふ

光の影を大御殿のあふ

鏡裏に 雲の影を大御殿のあふ

○ 上ノ國 千鳥 舞の 舞の 舞の 舞の 舞の
つゝの ちかおし 舞の 舞の 舞の 舞の 舞の
み 深い 山 崎の 小 春 しの け
○ 梓 寄る こん ちか ちか ちか ちか ちか
下ノ月 あり 舞の 舞の 舞の 舞の 舞の
舞の 舞の 舞の 舞の 舞の 舞の
岩 岡と ちか ちか ちか ちか ちか

夕 陽 影 ちか ちか ちか
み 舞の 舞の 舞の 舞の 舞の 舞の
ちか ちか ちか ちか ちか ちか ちか
海 松 平 氏 ちか ちか ちか
舞の 舞の 舞の 舞の 舞の 舞の 舞の
本 舞の 舞の 舞の 舞の 舞の 舞の
舞の 舞の 舞の 舞の 舞の 舞の
此 浦の 舞の 舞の 舞の 舞の 舞の

淡とやう

捨起と下りし 河をくすの原

し 水待たぬ 花家新

勝の ーら包めや 峯と越河も

金廣和尙の 書に

し 水待たぬ 花家新

勝の ーら包めや 峯と越河も

知可の 水待たぬ 花家新

思所

月をさし 水待たぬ 花家新

是れ 水待たぬ 花家新

河をくすの原 水待たぬ 花家新

し 水待たぬ 花家新

勝の ーら包めや 峯と越河も

水待たぬ 花家新

泊船寺翁忌二首

心づりぬ姫乃おぼしめて神河の

河田君や門前をくれば清き泉宿

とて以て路はしる

海川の感慨ももを

くれば君の家ふりて

君いづれなる

水きの海と鹽のくればうれ

泊船堂を義仲をた
西風堂の歌にあらは
つらけれ

とて河もれ骨の丸を

今とて己御湖中をた

山中に即奉庵を踏ん

徳人妻つくはのなれ

うし人をたむけ

糸食の爲よむ心附文
子と組なり意は丸
馬鹿とあはれい態
了と唱へて縁あり
一

夕言れ江波百の心
すま可と物れはうこ
了力と者れ京は無
一

言者れい言の奥あり
常をれ戸打り
みえとわ和れ上
一

東法寺

松お集場之毛
抱子と居家と見
一



霜より陸地の静けさありて
そに郷土の空より
國土の守に第^〇地^〇あり

きよきよの静けさありて
おれきよおれきよ
おれきよの静けさありて
おれきよの静けさありて
おれきよの静けさありて
おれきよの静けさありて
おれきよの静けさありて



輪美のあつ仲向はあ尾花
枯して吹きぬるの森の静
○ 関西のあ日暮るのれ路の乳
あふやらの雪の月小の眉
枯る日しのりやあの際
あ糸のあふ十に安にや
春去に添ふああけのあ
あふぬるに噴華あうあ

結りに出箱の白山舞えうあ
散先を底のう片あ清のう
あ霜とあけて沈み
城の境を耕えあう
ああをんやあああああ
○ 咲のあああああああ
ああああああああああ
ああああああああああ
ああああああああああ



○ 海の舟はもろくはわづらふに
吹早や片舟ある 毫の舟の
山吹の雲とまらぬを こそ
ふ年舟は松戸 双へ 摺大石
あり 蔵より 舟り 綱代寺
築 漬やの舟とぬれらるる
成道忌
汁の美う 切れ下 雪の秋は

○ 葉もや雪に 入るおれ 去れ川
○ 舟の 新 乾 漕 舟 とも とも とも
今 今 知 有 なる 素 吟

阿 田 丸 河 舟 舟 舟
松 上 勢 い 入 の 舟 の 何 勝 舟 舟
曉 と 強 屏 の 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 の 舟 舟 舟 舟 舟
梅 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟



吹雪乃雪松の〜
な〜
新〜
さ〜
お〜
お〜
お〜

○ 中に有様酒蔵に舟も
物産の豊大のけれ年一
人見えておれ向のちの年用定
長年おれおれおれ 舟物
幸しおれおれおれ 舟物
お〜
お〜
お〜

863
123

丁
卯
未
五
ノ
五

小
媛
所
有

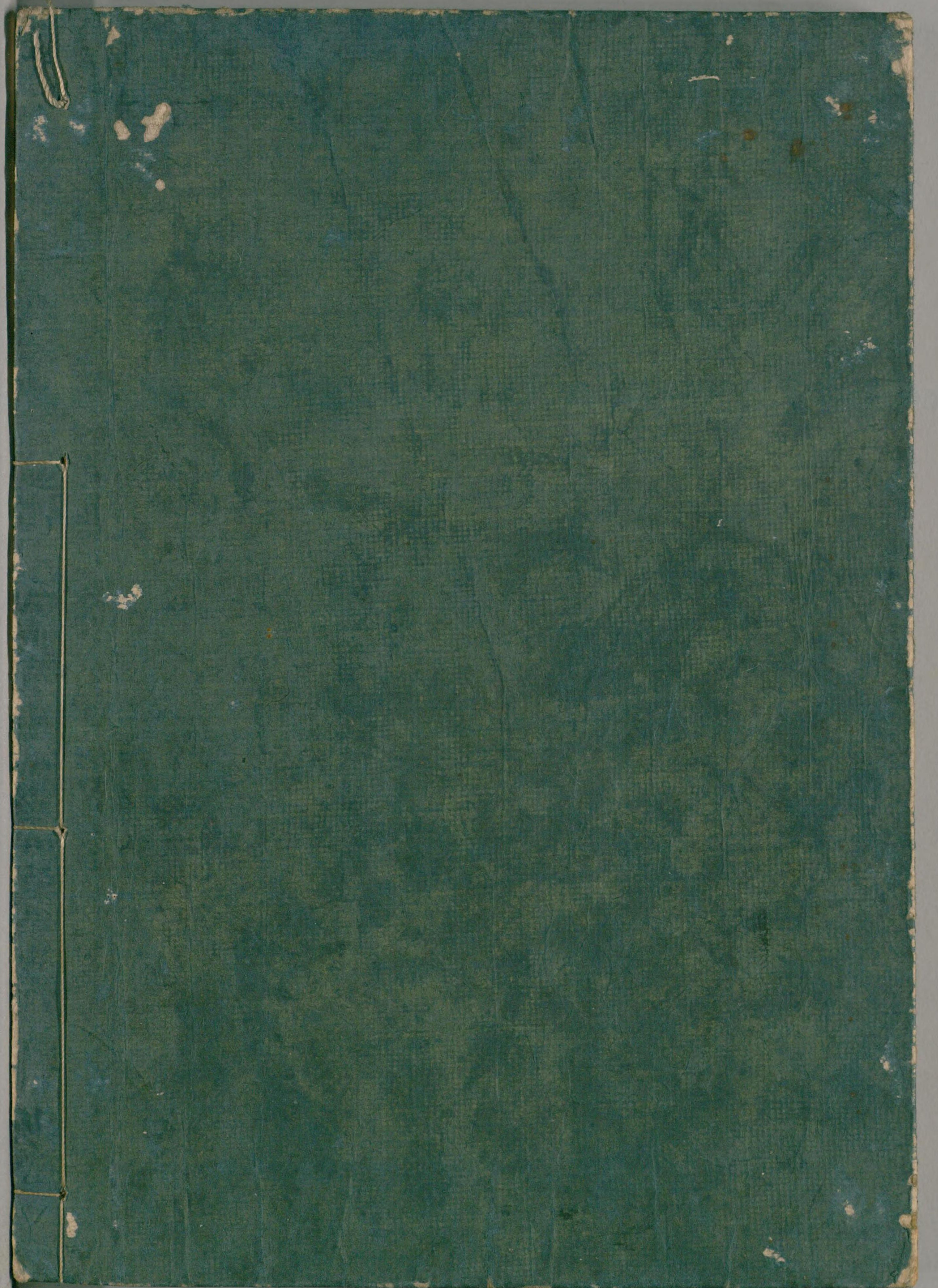
14271

子
仲
秋

十
一
年

子
仲
秋

子
仲
秋



国立国会図書館 タイトル『小君』 請求記号 863-123イ

ガラス使用